

PROOF

世界を見る



NATIONAL GEOGRAPHIC

阿蘇の草原と 生きる

この世界で
起きていることを、
さまざまな視点で
見つめる

写真=岩波 友紀
熊本県の阿蘇カルデラでは、
草原を維持するための野焼きが、
1000年以上も続けられてきた。

夏、阿蘇の大地が緑のじゅうたんに覆われた。ここは牧野(ぼくや、放牧地)として利用されている。手前の小山は、3000年前の噴火でできた米塚。



で崩れた。
上：南阿蘇村の池の窪牧野で牛を育てる山戸（やまと）直（なおし）さん。背景の烏帽子岳の斜面は2016年の熊本地震
下：同村の塩井社水源。農業用水などに使われてきた湧き水だが、地震後に枯れ、2年後に再び湧き出した。



える。
上：五穀豊穰（ほうじょう）を祈願して3月に行われる阿蘇神社の火振り神事。阿蘇の人々と火の古いつながりを今に伝
下：7月下旬、稲の育ち具合を神が見て回る神事「御田祭（おんだまつり）」で、白装束の女性たちが阿蘇神社周辺の田
園を歩く。

野焼きは阿蘇の早春の風物詩。3月半ば、阿蘇市の町古閑(まちこが)牧野では、炎が道路のすぐそばまで達し、辺り一面が煙に包まれた。



撮影の現場から

太古の巨大噴火でできたカルデラの中で、阿蘇の人たちは地震後の困難のなかでも、自然の恵みを忘れなかった。

阿蘇山の周辺には、南北25キロ、東西18キロに及ぶ巨大なカルデラ盆地がある。約27万～9万年前の火山活動で地面が陥没してできた地形だ。

火山がつくった独特な盆地の中で、人々は1000年以上前から野焼きをして草原を維持しながら、放牧を営んできた。美しい緑のじゅうたんは、人がつくった風景だ。阿蘇カルデラの中には現在、4万人余りが暮らしている。

フォトジャーナリストの岩波友紀は2016年4月の熊本地震の後に阿蘇を訪れたとき、水道が寸断された住民が湧き水を使う光景を目にし、そこから地下水と草原との関わりに思いが至る。そして、地震で崩れた放牧地でも、ボランティアの助けを借りて野焼きが

続けられていることを知った。もともと土砂災害が多いこの地域で、地元の人たちは「しょうがない、なんとかなる」と、草原の維持に奮闘していた。

地震や火山噴火は、水源や農地、放牧地となる大地をつくってくれた。だが、ひとたび私たちの身近な場所で起きれば災害になる。「太古の昔から破壊と再生を繰り返す自然の営みによって、恵みがもたらされているのだと再認識させられた」と岩波は語る。

福島を長年取材してきた岩波は、一度失われた自然を取り戻すことの難しさを痛感してきた。だからこそ、災害に遭っても、今ある自然の恩恵を絶やさないように頑張る阿蘇の人たちの姿に心を打たれたのだ。 — 藤原 隆雄



4月半ばの夕暮れ時、阿蘇市の佐渡ヶ迫牧野で野焼きを手伝うボランティア。